『着物リメイクは人生のリメイク 』――
荻原（おぎはら）　美恵（みえ）さんの紡ぎゆく夢

日光が差し込む明るい店内で、ひときわ笑顔の荻原美恵さん。

彼女の周りには、自分の子どものように愛情を注いだ作品たちが並び、その一つ一つが彼女の人生の軌跡を物語っています。

JR 木ノ下駅から西へ 5 分ほど歩いたところに「着物工房　綸（りん）」があります。彼女がどのようにして店を立ち上げ、どのような想いで日々の仕事に向き合っているのか、そして未来に向けたビジョンについてお話を伺いました。

Q:　家業を継ぐという選択をされた経緯を教えてください。

元々、実家が営んでいた理髪店で、二人姉妹の長女としてその後を継ぐものだと思っていたのです。しかし理容師という仕事はあまり好きではありませんでした。家業が理髪店じゃなかったら洋裁学校へ行きたかったのです。母親が着物の仕立師をしていて、たくさんの着物に囲まれた環境だったせいでしょうか。しかし、学校を卒業した後は家業を継ぐため迷わず理容の専門学校へと進みました。学校での修行を終え、同業の夫とは学校が違うにもかかわらず運命の出会いがあり結婚。夫は理髪店の3代目の長男だったことから夫と共に義実家の店を継ぐことになったのです。子宝にも恵まれました。ところがある日のこと、子どもから、『お母さん、高校に行ってないの？』と言われたのです。当時、専門職に進むなら中学を出てすぐというのが一般的な時代だったのですが、今は高校進学率 99%です。このままではいけないと一念発起。お店をしながら通信制で高校卒業資格を取得しました。37歳の時でした。

Q: 理容師から着物リメイクデザイナーへの転身の様子を教えてください。

実は、41 歳の時に夫が病気で他界したのです。そのことは自分の人生が一変する出来事となりました。義母と二人の子どもとの生活のため、お店でがむしゃらに働きました。悲しんでいる暇もなかったのです。店の常連さんたちが『頑張れよ。ずっと通うから』と、温かい声をかけてくれました。この時、私は、この環境に助けられたのです。

そうして、ただ、生活のために働くということを長らく続けていくうちに『生きている間に、自分の夢を叶えて人生を卒業したい』との想いがどうしようもなく膨らんできました。洋裁への想いです。それまでは、自分の気持ちをひたすら抑えていました。70 歳になったら理髪店を閉めようと計画したものの、昔からのお客様から「俺はこれからどうしたらいいの」などの言葉を聞くとなかなか閉店に踏み切ることができませんでした。ところが、69 歳の時に重度の肺炎になり思いがけず 10 日間ほど入院したのです。ベッドから天井を眺めているうちに「私にはまだやりたいことがある。急がなきゃ。70歳まで待ってられない。」この入院を「絶好のチャンス」と捉えました。病からの回復期、入院先のベッドの上から、お得意先に理髪店閉店のご挨拶状を送りました。50 年以上続けた店でしたが、スムーズに着物リメイクへ業態転換できたのは、この 10 日間の入院には、何か不思議なお導きがあったのだろうと思っています。**Q: 元理容師としての経験が今の仕事にどのように活かされていますか？**

接客スキルは教室運営にとって重要なポイントだと思っています。理容師時代に培った経験は、教室での、生徒さんとのコミュニケーションに役立っています。意識してはいないけれど身体に沁みついています。教室の生徒さんとの信頼関係は特に大切にしています。そして、経営の楽しさはサロン経営で学びました。

Q: 着物をリメイクする際、最も大切にしていることは何ですか？

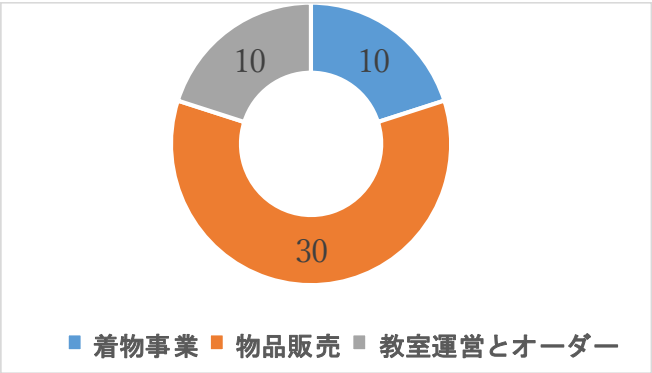
私は、着物リメイクを「人生のリメイク」と言っています。日本の着物の特別な素材に敬意を払っています。一枚一枚着物の命を大切にしたいのです。蚕(かいこ)から作られた絹は命を持ったもの。そのような生地は世界に類を見ないのです。それに、リメイクした着物を着ることで、新しい自分を発見してもらえることが何より嬉しいのです。最初のうちは趣味で作っていたので作ること自体を楽しんでいましたが、今はプロとしての誇りとプライドを持って洋服づくりをしています。

Q:「綸」という名前に込められた意味と想い教えてください。

実父、夫、息子の名前が全て漢字一文字だったので、お店の名前も漢字一文字にしようと決めてました。「綸子（りんず）という、着物生地の名前から『綸（りん）』の字をもらいました。それと、最後に『ん』が付く名前のお店はつぶれないという話をどこかで聞いたのです。ゲン担ぎです(笑)

Q:　着物を洋服にリメイクする過程の反響は如何でしたか？

洋裁を生業とするようになって2年目に、初めて行った販売会で手ごたえを感じました。それをきっかけにして着物リメイクの魅力を少しずつ発信していきました。私の経歴が元理容師だったことも珍しかったと思います。塩尻のカルチャーセンターから講師の依頼を受けたことは、私にとって大きな転機でした。作品の販売だけではなく、「教える」ということが新たに仕事になりました。ただ、自宅から遠い地域での講師だったので通える自信がないため最初はお断りしていたのです。ところが、その担当者が「あなたの作る作品はデザインがいい」と言ってくれたのです。私の着物リメイク作品はデザイン性を重視したもので、私自身が「着たい」と思うものでした。今までの着物リメイクのイメージを変えたと思います。私は、着物の柄の出方や色の出し方とデザインで勝負してます。子どものころからファッションに興味があり、東京へ行っても街角でずっと「人」を観察していました。



※ ある月の売上内訳（円／月）参照

３年前、コロナが収束したあと初めてファッションショーを開催しました。モデルはすべて素人さんで、全員が当日初めて顔を合わせ、レッドカーペットのランウェイを歩いてもらったのです。当日たった一度だけの練習で、フォトコールでは皆さんが自然に素敵なポーズを取ってくれたことは本当に驚きました。モデルさんもお客様も楽しんでくださり、とても忘れられない時間となりました。年齢は上は 80 代、下は小学生でした。2026 年１月には2回目のファッションショーをするのですが、今度は高校生のモデルさんにも何人か着て歩いてもらいます。日本にはかつて、生活の中に息づいていた着物文化がありました。絹は自分で洗濯できないので大切に着たものです。着物はほどいて洗って体型に合わせて仕立直しができます。自分で仕立が出来ないとお嫁に行けないと言われていた時代もありました。染め直しもできるし糸もほどいては強い糸に変えて縫いなおす、始末する･･･のに、今は安価な洋服だからとポイっと捨ててすぐに新しいものを求めるようになってしまいました。日本人のかつてのモノを大切にする心はどこへ行ってしまったのでしょうか。

Q: チャレンジを続けるための原動力は何ですか？

私は着物リメイクを通して「日本人の心」を取り戻したいと思っています。絹を纏うと不思議と所作や優雅さといったことに気を遣うようになるのです。そういったことで少しずつでも日本人らしい所作が自然とふるまえる大人が増えて欲しいと思っています。そうは言っても着物リメイク服を皆さんに日常使いで楽しんでもらえることが一番の原動力です。

実は海外でファッションショーをしてみたいと思っています。海外の方の着物リメイク作品の評判を聞いているうちに、自分でも世界に向けてやってみようという気になりました。日本より海外のほうがアップサイクル文化が進んでいることから、この取組に合致した着物リメイクが、世界に広がることを夢見ています。

それと、歳を重ねいろいろなしがらみがなくなったことで、やりたいことに、自由に決断ができるようになりました。親を看取り、子も巣立った今が一番楽しいのです。70 代は人生の黄金期だと思っています。

まとめ

美恵さんの言葉と姿勢からは、着物に対する深い愛情と自分自身を大切にする気持ちが伝わってきます。どんな時でも、家族やお客様、そして自分の心に向き合いながら歩んできた道のりは、まさに「着物リメイク」というアートを超えた「人生のリメイク」です。彼女が作り出す一つ一つの作品には、ただの生地や糸ではなく、家族の思い出や、悲しみを乗り越えた強さ、そして人々への慈愛が詰まっています。

決して楽な道を選んだわけではありません。40代で夫と死別という悲しく辛い出来事、家業を背負いながら、自分の夢に向かって新たな挑戦を始めることは、大きな決断でした。その中で、「何が一番大切か」をしっかりと見極め、またとないタイミングでその思いを形にしています。実はやりたくなかったという理容師という仕事でも、『経営』に楽しみを見い出しました。着物リメイクという事業は、単なる「もの作り」にとどまらず、過去と現在、そして未来を繋ぐ架け橋であり、そこには彼女の人生そのものが映し出されています。更に、サロンで身につけた経営の手腕がいかんなく発揮されているのです。

「これからやりたいこと」について語る美恵さんの目は、まるで少年のような純粋な輝きを放っており、単なる夢物語ではなく、確実に実現へと向かっています。自分を信じて進むことの大切さ、そして周囲の支えを大切にしながら、自分の夢を実現し続ける姿に、心から感動を覚えました。いくつになっても新たな挑戦ができるということを教えてくれた美恵さんの姿勢は『もう一度、やってみよう』という、大きな勇気を運んでくれました。

【箕ル起業】では、そんな美恵さんの「やりたいこと」に寄り添い、更なる目標に向かって伴走していきます。

取材・ ： 平賀裕子、千田るみ子

構成・執筆 ： 千田るみ子

ご協力 ： アトリエ綸　荻原美恵さん

追記

取材後、2026 年 1 月 18 日に、 伊那市の信州 INA セミナーハウス内カフェブレッザ（このイベントを最後に閉店）にて、アトリエ綸主催第 2 回　着物リメイクファッションショーが開催されました。

ステージに美恵さんが登壇されると、歓声がひときわ大きくなりました。また、質問に答える形のトークコーナーでは笑いもあり会場は大いに盛り上がりました。ご自身の衣装の着物リメイクも、着物素材に白いレースがあしらわれたもので、可憐でとてもお似合いでした。ショーはこのうえなく豪華かつ、しとやかで、作品から伝わる思いも一緒に会場中に漂い、モデルと観客が一体となって最高の空間を演出していました。何より、生徒の皆さんに囲まれて笑顔満開の美恵さんが、誰よりも一番輝いていたのは言うまでもありません。

そして、２０２６年８月、「着物工房　綸」は、オーストラリアで展示販売会を開催することが決定しました。

オーストラリアへは、売ろうと思って行くのではな着物の活用を知って欲しいとの想いのみだと言います。

それでも、「オーストラリアの人に受け入れられる洋服ってどんなデザインがいいかしら」と、ただ単に自分が好きな服を作るのではなく、着る人に寄り添うことを第一に考えています。「一枚も売れなくていいの。ただ、・・・・重いから減らして来れればいいんだけどね(笑)」と笑っていました。

美恵さんの無垢な輝きは、オーストラリアの地で更に大きな光を放つことでしょう。